

第 21 回 World Congress of Endoscopic Surgeons : WCES 体験記

岐阜大学医学部附属病院 消化器外科 外村俊平

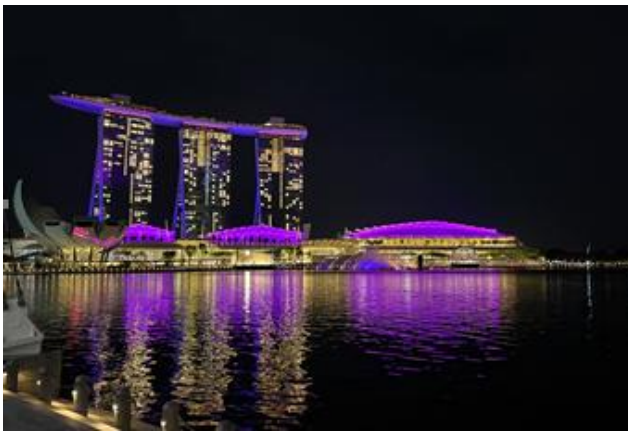
1.はじめに

5 岐阜大学医学部附属病院消化器外科に所属しております外村俊平と申します。

私は 2023 年より入局し、現在専攻医として臨床に携わっております。

今回、岐阜大学医学部附属病院国際医療センターによる国際学会参加支援事業
プログラムからご支援いただき、2025 年 11 月 4 日から 2025 年 11 月 9 日にシン
ガポールで開催された World Congress of Endoscopic Surgeons(WCES)に参加さ
10 せていただきました。国際学会での発表は今回で 2 回目ではありますが、前は
2023 年に横浜で開催された国際胃癌学会での発表でしたので、本格的な海外で
の発表は初めてでした。また、個人的にも海外に行くのは 10 年ぶりでしたの
で、多くの不安を抱えながら参加させていただきました。

このような貴重な機会をいただき感謝を申し上げるとともに、海外学会で得た
15 経験を体験記としてご報告させていただきます。



2. WCES について

WCES は国際内視鏡外科学会連合(International Federation of Societies of Endoscopic Surgeons : IFSES)が主催する学会で、低侵襲手術に関する最新技術や研究、教育を共有し議論することを目的としています。その一環で今回から

5 MIS Championship というドライボックスの世界大会が開催されました。畑中勇治先生が日本のエースとして参加し、優勝する姿をみて自分も精進しなければと感じました。

展示ブースでは手術支援ロボットを筆頭に、日本にまだ導入されていない医療用品の説明を受けることができました。一個下の大熊先生がスタンプラリーのため全てのブースをまわると言い出し、ブース毎でスタンプをくださいと言っていました。当然スタンプをもらいにいくと業者の方が英語で説明してくださるので、二人で楽しく学ぶことができました。ちなみにスタンプラリーを集めたのは私たちが 6 人目でした。

手術支援ロボットに関しては、アームがそれぞれ独立しているものはアーム同士
15 士の干渉が少なく、手術操作のストレスが軽減するのではないかと感じました。その他印象に残ったものとして、結紮の出来映えをスコアリングできる機械がありました。これは結紮後の組織に圧力をかけ、結紮による組織の密着性や、組織に対し適切な力で結紮されているかを評価していました。練習はどうしても「タイム」というわかりやすい数字を重視しがちですが、実際の患者様を相手にした
20 場合は丁寧さも重要であり、このような多角的に評価できるツールは技術向上のため有効な手段だと感じました。



3.発表内容

- 5 私は、"Short- and long-term outcomes of laparoscopic and endoscopic cooperative surgery for duodenal tumor (DLECS)"というタイトルで、自施設における DLECS の治療成績について発表をさせていただきました。ポスター発表で提出し途中まで作成していましたが、Rapid Oral での採択となり慌てたことも今となってはいい思い出です。発表時間は 5 分で質問時間は 2 分という枠組みで
- 10 したが、座長の先生がおらず 20 分ほど遅れて開始したため、他の先生方の発表は座長からの質問もなく進んでいきました。その中で、私の発表の際には座長の先生からご質問いただき、またセッション終了後に発表を聞いてくださった中国の方からご質問いただくことができました。英語に不安があり、質問が来ること

に怯えておりましたが、興味を引く発表ができたことを喜ばしく思いなんとか必死に返答しました。

腹腔鏡内視鏡合同手術(laparoscopic and endoscopic cooperative surgery: LECS)は日本において稀な術式ではありませんが、海外ではなかなか行われない術式とのことでした。日本は内視鏡的治療が以前から多く行われており、内視鏡の立ち位置として診断と治療の両方の側面があるのに対し、海外では内視鏡は診断の側面が強いことが背景にあるのではないかと感じました。また、海外では外科医が内視鏡を行うことも多く、合同手術時の人員確保も難しいのではないかなと思いました。



10

4.おわりに

今回の WCES では、ここに書ききれないほど多くの学びがありました。手技に関しては、日本の外科は世界でもトップクラスの技術力を持っていると改めて実感し、この伝統をしっかり守り、さらに次世代へつなげていけるよう日々研鑽

15

していきたいという思いが強くなりました。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった消化器外科・乳腺外科・小児外科教授 松橋延壽教授、発表にあたりご指導いただきました安福至先生をはじめ、医局の先生方に厚く御礼申し上げます。